慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	カロリン・ フォックス女史とジョン・ スチュアート・ ミル (三)
Sub Title	
Author	榎本, 鉱治
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1923
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.17, No.5 (1923. 5) ,p.796(124)- 812(140)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	雑録
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19230501-0124

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

カロリン・フォックス女史とジョン・スチュアート・ミル（三）

榎本鑛治

八

一八四〇年三月十六日 John Stuart Mill は、病弟 Henry Mill を Falmouth に訪れて以來、此地に滯在すること約一ヶ月に垂んとする。是れより先き Mill は、一八二八年及び同三六年の兩度に拔擢されて、當時東印度會社の文書審査局主席書記の職にあつたので、彼の長期に亘る不在は、相當に社務に及ぼす所があつたに相違ない。果せる哉、四月十日彼は、東印度會社より招致されたのである。Caroline Fox 女史の日記に依れば、John Mill 丈けは此夜直ちに發足して倫敦に歸つたが、他の家族は翌十一日 Falmouth を引上げたのである。

Fox 女史が、四月十日附の日記に於て John Stuart Mill に關說した所を左に引用する。即ち

「…あの不思議な程鋭い落著いた兩眼を通じて、眞理に對する或閃きがあつた。彼の父 James Mill の敎育上に於ける理想は、子供達をして一事を充分に理解させることにあつた。是れは、單に心意に對する好い練習であるのみならず、又他の問題に對する彼等の智識、即ち夫れが皮相淺薄であるや否やを批判するための標準を、彼等の心中に創造するものである。James Mill は、子供に取て餘り容易いこと、又は餘り面白いことを好まなかつた。例へば梅の實を子供に與へるにしても、あれやこれやと撰び出してはならぬ。若しさうするならば、何時になつても子供は何れが甘いかを見分る力を容易く會得しないであらう。一體子供に取て、技術は會得するに困難なことであるが、人間の一生を通じて子供の時代程物事に順應し得る時はない。人間の一生は一の奮鬪であらねばならぬ。故に人の子には、其子供の時代に、勇敢に奮鬪し、さうして困難に打勝つことを敎込まなければならぬ。即ち此筆法が、James Mill の採用した所である。John Mill は、十八才に滿たずして宗敎史を研究させられた。此幼時に於ける猛烈なる勉强法は、恐らく John Mill と雖も他人に薦めないであらう。多くの場合其效果は、充分擧がらないであらうし、又假令其效果が見えるとしても、若い時代の快活さは、全く早熟のために蔽はれてしまひ、さうして若々しい活動も反省され勝ちになる。現に John Mill 自身ですら、『私には全然子供の時代がなかつた。クリケットの遊戯を嘗てしたことがない。天性をして其自然の途を歩ませる方が宜しい』と云つた。

佛蘭西に關する論文に於て、Mill は、他の如何なる論文に於けるよりも彼の性質を着色させて居る。即ち佛蘭西に於ける彼の見聞は、彼をして非常に興味を覺えさせたのである。Mill に依れば、佛蘭西に於ける現時の感情の調子は、普に思想家の間のみならず、又最も有力なる中產階級の間に於ける一大進步的變化を指示して居る。彼等の到達した點は、善であり眞であり不易である所のことを熱心に追求するに在る。彼等の最初の意見、即ち彼等が單に傳統と偏見とよりのみ吸收したものは、今や彼等の拋棄する所となり、さうして彼等の心意は熱心に眞理へと向けられて居る。共和政體は、假令人は自治の命令を信ずてう抽象的原理に於て正當であるとするも、夫れは未來永劫佛國人に適應するも

のではなからう。今佛國人は指導者に從はねばならぬとすれば、選擧に基づく王政（elective monarchy）こそ、將來に於ける政體であらう。

一體佛國人は、多く人間を望むが、英國人は事物を望む。故に英國に於ては、何等か著しい進歩が認められる前に心意的擴大（mental enlargement）てう方法に於てなされなければならないことが多い。Charles　一世時代の英國と、革命以前の佛國とは、多く同一の狀態にあつた。然るに佛國人は、彼等自身の信仰の確實性を信じたので、他人を責める保證があるものと思つた。之に反して英國人は、確かに信ずる所がないから、敢えて意見の相違を責めることが出來ない。Carlyle の言葉を借用すれば、『自己の菓子を食ふ以上に望む』人は、皆彼が成就す可き大戰爭を有すると考へる。そこで或者は、奮鬪を繼續するよりも寧ろ夫れに倒れる。さうして彼等の正義の觀念は、如何にも彼等を導いて自己非難に赴かせる。何人と雖も、若し待つて聽きさへすれば、彼自身の胸裡の神殿に於て間違ひなき指導を有するものである。そこで或者は、長い間不安の狀態を繼續するけれど、其不安の狀態が、肉體上の疾患の場合を除いて、終局まで繼續することは特有である。此點に於て賢友若くは書物が、夫れを熱心に探求する人に對して、眞理を解き明かすに不思議な、又愉快な效果や、明確なる信仰や、平和なる良心等を往々齎らすものである。此過程に依て各人は、眞理に對する別異の見地に到達するのである。何人と雖も、完全に眞理を知るものではない。否、地球と時間とに束縛される限り、人は完全なる眞理を知ることが出來ないのである。

次は米國の問題である。Mill は、米國に於て共和政體の實驗が試みられて居ることを感謝して居る。併し夫れは、失敗である。さうして永久に失敗せねばならない。何故と云ふに共和政體の場合には、常に事物を適當の順序に整頓するに必要である所の二個の對抗力、即ち政府と輿論とが缺けるからである。米國は輿論丈けに從ふ。さうして米國に於ける輿論は、性格の一特殊的典型（即ち大統領）に贊成して決定するのであるから、總てが輿論への接近を目的とし、又其結果は大なる同一さと云ふことになる。斯くて米國には、其過程に於て、凡俗に所謂專制と同樣なことが行はれる。是等二個の對抗的原動力（即ち輿論と專制）は、國家の福祉に取て重要なものである。若し何れかゞ優勢なものとなれば、夫れは、總ての我儘な、抑制されない、增長した人間と同樣に、甚だ厄介なものとなる。夫れが過度に存在する時は、其性質を一變して、善が惡となる。

死刑に對して Mill は、反對者である。さうして Carlyle と同じく、人を以てなし得る最惡の事は、人の首を絞ることであると考へて居る。

此日倫敦へ出立するに先立つて John Mill と Clara Mill とは、Henry の墓參に赴いた。因に Henry の墓石には、何等の頌詞もなく、一字の碑文もない。唯だ『ヘンリー・ミル、享年十九』と彫刻してある丈けである。豫ねて J. S. Mill が私に約束した所の芳香の曆は、左の如く作製された。

芳　香　の　曆

（Linnæus　等の各種植物目錄を模倣す）。

自然の美はしい色取は、絶えず變化して三月より十月まで繼續す。併し自然の芳香は夏の半ばで終る。三月より七月までは、

絶えず繼續して、壹度となく夜となく、空中に芳香が漂ふ。併し秋の芳香は、此春に於て、春の芳香を省略したと同じく、探して後求めねばならないから、省略した。故に芳香の曆は月桂樹に始まり、シナノキに終る。

三月――一般の月桂樹。

四月――薑菜、ハリエニシダ、ケイラン草、一般の廣葉柳、林檎の花。

五月――紫丁香花、紫羅欄花屬（夜咲）、キバナノハタザヲ屬（夜咲）、キンゲサリ、山櫨、セリンガ、野薔薇、木犀草、豆畑、各種の夏薔薇、乾草、葡萄牙月桂樹、各種の石竹屬。

七月――普通のアカシア、繡線菊屬、忍冬、重瓣眺金蘰、瓜、シナノキ。

晩秋に遲走せの芳香草がある。名付けて、ハンショウヅルと云ひ、田舍家の外壁を飾るものであるが、折角の連續線を切斷するから、既孤立物は芳香の曆より除外される。

親友 J. S. Mill.

Caroline Fox 女史へ

Cunningham が J. S. Mill の肖像を見せたが、大變奇麗であつた。其理想的の頭は、如何にも堪忍的理想を以て膨脹し、其顏は、頗る優雅に出來上つて居た』。（Memories of Old Friends, edited by Horace N. Pym, 1882, pp. 85-88）

四月十日附の日記に於て Fox 女史が、J. S. Mill に關說した所は、以上に盡るが、其後暫らく即ち四月二十六日迄、女史の日記中に Mill に關する記述はないのである。

九

次に四月二十六日記の日記には、Fox 女史は、兄 Robert Barclay 宛た John Stuart Mill の長い手紙を引用してある。其手紙は、四月十六日附にて東印度會社より差出されたものである。即ち

「私の親愛なる友、――貴君は私に斯る同輩の形式を用ふるのをお許し下さるか何うか――吾々は、貴君の深切な同情ある書信を頂いて大變愉快でした。吾々を後に殘して去つた彼（Henry Mill）に就ては、既に私が申した事以上に何か申すのは、無駄です。彼の赴いた所へは、吾々も程なく行かなければならないのです。彼に就て考へることは、現在此處に在るので、將來も亦此處に在るでせう。而して餘り早く倒れた者の記憶は、殘存者に取てより深い、若くはより有益な印象を殘す底の如きものであることが、先づないと申して差支へありません。斯の如き出來事が呼び起す樣々の嚴肅な感情の中には、吾々に最も印象を與へる或物、即ち何人でも彼自身のより特殊的指導のため引出す或教訓が、常にあるものです。即ち私に取て其教訓は『今日と云ふ日に働け、今に働けない夜が來る』（Work while it is called to-day; the night cometh in which no man can work.）と謂ふのです。人は誰でも、彼が一生の友として連立つのみならず、又死後に於ける後繼者として殘さうと希望して居た所の或人を失ふ迄、先づ一生の短くして不安なることに就て、常套に云はれる總ての眞理と、意義とを充分に感知して居ないものです。抑もなす可き總ての仕事を有する人は、努力して居るのは、何故であるか、且私が、私の仕事の一部分を仕遂げて、幾分かでも Carlyle の常用語の如く、『私の使命を傳へた』人には、誰で

も其儘にして置いたのは、何故であるか、是れを推測するだに、吾々の智慧の遠く及ばぬ所であります。併し若しも此中に何等か目的があるとすれば、其目的は、唯だ彼の殘りの生涯が、其無爲の儘にてなされるよりも、遙かに有用になされ得る場合に於てのみ、達成され得るやうに思はれます。少なくとも吾々の知つて居ることは、彼の如く吾々もある其日には、全生涯は唯だ一日としてのみ現はれ、而も吾々に取ては如何なる瞬間の唯一の問題も、『其日は浪費されたか』と云ふに盡ることでせう。勿論、如何に短い時でも幸福と道德的善との源泉となる人は、假令其源泉が極めて狹い範圍に限られて居ても、彼の殘りの生涯を浪費するものではありません。併し茲に唯一の平明なる人生の準則があります。夫れは、永久に人生を束縛し、凡ゆる信條の變化に關係なく、又其信條を解釋する場合に、最大の倫理と最小の倫理とを包含するものです。夫れは斯うです、――『能力と外的狀態とを正しく考慮して、汝がなし得可き最高の事を見出す迄、倦まず努力せよ。然る後夫れをなせ』(Try thyself unweariedly till thou findest the highest thing thou art capable of doing, faculties and outward ciscumstances being both duly considered, and then Do it.)

貴君が嘗て私の舊稿に就て申されたことを繰返されるのは、大變深切です。古い定期刊行物の賣殘りの贈物などは、何うしたつてあんなに丁寧な感謝の言葉を喚起すことの出來るものではありません。且又私は、貴君に多かれ少かれ其閲讀を期待すると正直に申すにしても、其結果は、夫れに動かされるのではなくして、先づ反對の感情を抱かれたことでせう。之に關する私の主情は斯うです。――貴君は或執筆者に就て聞きたさうです。而して私自身の考へに依て貴君の感情を判斷すれば、彼等執筆者の書いた或物に注目して、彼等が如何なる種類の人物であるかを想像することの出來るのは、屢々貴君に取て愉快であらうと思ひます。私自身の論文に關する限り、稀れではあるが時として、私は三百哩も隔つる友達と談話を交へて居るのであるかも知れないと考へて、頗る勝手な愉快も其處に在るのです。

吾々へボ著述者は、單に吾々の最善の思想のみならず、吾々の最善の感情をも吾々の論文中に注入し勝ちです。否、少なくとも若し事物が吾々の中にあるならば、他の如何なる藥を以てするも、完全に若くは明白に吾々から出ないでせう。故に何んでも眞に好まれやうと欲する時に、――何人でも賞讃を博さうと思ふのは、極く若い時に限りますが――吾々の論文が、吾々自身よりも、よく知られるのは、屢々吾々に取て利益です。

私の是等特殊的論文に於て、何等か永久的價値に對する口實を有するものは、總て、貴君の倫敦に居られる間に、二冊の小本に取纒められるでせう。而して私は、貴君に對して最も愉快に夫れを捧げませう。殘りの論文は、專ら政論であつて、何人に取ても今は殆んど價値がありませんが、夫等の論文に於て私は、多大の苦心を以て現時の人々を所謂哲學的急進派(the Radical party)へ引入れやうと試みました。併し見事に失敗しました。――即ち夫等のひからびた骨を生かせることが出來ませんでした。勿論、多くの失敗の中には、確かに成功したのもあります。其唯一の實例は、斯う常に云はれ得る限り、私がDurham卿を救つたと云ふことでして、私は夫れを知つて幾分滿足する所があり

ます。現に Durham 卿自身は、大變私に感謝して斯う申しました『余（Durham卿）が加奈陀より歸國して受けた歡迎は、抑も何に起因するかと云へば、夫れは最近公表された貴下（J. S. Mill）の論文以外に何も知りません』と。若し貴君が其論文をお讀みになれば、文中に於て其様な陳述を支持するものが何であるかを疑はれるでせう。併し其公表當時は萬事斯うでした。總ての人が、Durham 卿に反對のやうに思はれて、何人も敢えて卿のために一言すら辯じなかつたのです。從來彼に盛に阿り諂つて居た其人々すら、――勿論私は決して追從しませんでしたが――引込んでしまうか、若くはホンの御座なりの辯解をする位が關の山でした。併し私の確信を以てすれば夫れは、卑怯からではなくして政治學の原則上常に考へ及ばなかつたゝめに、彼等は、彼等の嘗て期待しなかつた偶發の出來事に不意打ちを喰はされ、而も彼等の支持す可らざる或事に關係するのを恐れてしまつたのです。若し是れが進行したならば、輿論は非常に強く卿に反對して、遂には Durham 卿及び Charles Buller 共著の立派な報告書も、殆んど事態を動かすことが出來なかつたでせう。即ち其問題に對する意見と知識とを證明し得る或者が、其危急の場合に挑戰し、單なる釋放の代りに卿のために名譽と光榮とを斷乎として要求し、卿に贊して一の索制運動をなし、卿に聲援せんと欲する人々を激勵し、以て人心をして其問題に疑を掛けさせて置かなかつたならば、恐らく卿は見捨てられた人となつたでせう。而も私を除いて之に當る者は、先づなかつたらしい。扨て私が挑戰して三四ヶ月を經ると、Durham 卿の報告書が公表されました。此時に始めて世人は、私の正しかつたことを口にしました。

是れは、私が人物評論を試みた以來、私自身成功したと斷言し得る僅か三論文の一です。第二の成功は、Carlyle の『佛蘭西革命史』の成功を大いに速めたことにあります。彼の著書は、世人の大多數に取て頗る未知のことに屬し、又甚だ難解のものでしたから、果して夫れが成功するか否かは、一に骰子の轉向に依存して居るやうに思はれました。そこで私は、最初に評論し、眞先きに喇叭を吹き、最高の天才たる榮譽を與ふ可しと論じて、氣早に非難するヘボ批評家を驚かし、公平に取扱はさせ、斯くて其著の成功を確實にしました。

私の第三の成功は、Guizot が大思想家であり、大著述家である次第を、世人の耳に響かせたことです。其結果遂に世人は、次第〳〵に Guizot の著作を讀むやうになりました。併し私がなくとも、英國人は Guizot を讀むやうになるであらうことは、私に信じられません。

以上が、私の編輯と評論とより得た總ての世界に關する完全な記述であると思ひます。

何卒私の手紙に於ける自慢をお宥し下さい。私は、貴君の御家族と私との交際した數週間に於てなした程に多く、今迄に於ける私自身を申上げたことは、本當に他に思ひ當りません。併し夫れは、よもや私の缺點と申されますまい。何故なら多くの人は非常に遠慮して居るものと、私は考へますし、又私は、今度貴君にお會ひする場合に於ける非常に重々しい所を變じて、私の會話に於て、過日御面談致した時に比して、――Calvert 醫師の申した如く――より客觀的、より非主觀的たらしめるやうに致したからです。

親友 J. S. Mill」

(ibid., pp. 90-94)

尙ほ右の手紙が、一九一〇年 Hugh S. R. Elliot 氏の編纂せる二卷の「ミル書翰集」(Letters of John Stuart Mill) 中より取除かれたことは、編者 Elliot 氏が其序文中に斷つて居る。(Letters of John Stuart Mill, edit. by Hugh S. R. Elliot, 1910, vol. I Preface, p.vi.)

†

Fox 女史の日記は、再び暫らく J. S. Mill に關說した所がない。併し翌五月十九日附の日記は、倫敦と書いてある所より見れば、既に女史は、倫敦を訪れたものである。此日の日記に依て、女史は Thomas Carlyle 崇拜者に Carlyle 熱を煽られた所へ、彼の「劵狀主義論」(Chartism, 1839) に刺戟されたものから、偶々倫敦に開かれた彼の「英雄崇拜論」(Heroes and Hero-Worship) の講義へ出席するために倫敦へ出向いたものと考へられる。此講義は Edward Street の講堂で開かれたものである。女史は、J. S. Mill の妹 Harriet を伴つて出席した。其席上 Harriet の紹介で女史は、Carlyle 夫人に面會した。女史の叙せる講義の模樣なぞ、今は省略する。

講義を終つて、Fox 女史等は、Kensington Square の Mill の住家へ戻つた。丁度 Mill は、食事中であつた。其邊で女史は、小さい庭を散歩すると、Clara の愛好した Falmouth の植物や、Henry の仙人掌(サボテン)や、其他可愛らしい追憶となるものを見た。

「私達は、John Mill の書齋へ導かれて、彼の採集した押葉押花を見た。彼の母は種々なものを見せたので、John は私達が迷惑をしないかと甚く心配した。其處で彼は、「衣裳哲學」(Sartor Resartus) の有名な文句を讀み聞かせた。夫れは、George Fox に關する所であつたが、彼は夫れを讀む間興奮して聲を震はせて居た。又 Grote 夫人の風變りな點を二三話したが、是れぞ、Sidney Smith の洒落『Grotesque』(奇怪な) と云ふ語の起源である。夫れより種々な Bentham の胸像を見て話したが、John Mill は、『誰でも私の面前で Bentham の意見を論議する時聊かも差控へる必要はありません』と云つたが、如何にも彼の評論は是れを證明して居る。Mill の母は、私達に Bentham の愛好したお菓子を出した」

次に Fox 女史等は、John Mill の案内で Hyde Park を散步した。其途次 Mill は John Sterling に就て語つたが、其要旨は左の如くである。

「若き時代の John Sterling は、婦人の心情に於ける總ての美はしき特性と優雅との所有者であつたが、遂に彼は、彼のなす可き仕事あるに氣付いた。而して彼は、熱心に其本質を確めるに努めたが、長い間其結果は求められなかつた。此時代を通じて彼は、夫れが出來ないと云ふ意味に於て、不安であり、不幸であつた。是れは、彼が西印度より歸國す迄繼續した。彼は、西印度に於て忍耐し、辛抱し、熱心になり、又眞面目であつたが、夫れに報いられる所は充分であつたのである。即ち彼は、行爲の健全なる原則を打建て、之を宣傳する方が、自己の利用法であるかも知れぬと覺つた。夫れ以來彼は、平靜となり、滿足を得て居るのである。彼の著作は、總ての人の價値を增す底のものであるけれど、彼の會話に劣る所がある。元來彼は、會話の中に彼の最善の思想を注入し、以て其思想を他人に會得させると云ふ稀有の力を有つて居る」と。

最後に Fox 夫人と John Mill との話は、基督教の精神に反對し、之を亡ぼすものとしての宗派の精神に及んだ。此點に於てクェーカー教

は、其根本的特性上、他の宗派よりも其恐れが少ない。併しクェーカー教に限らず總ての宗派に於ける制限された精神(esprits bornes)の特性と相違とが、其一致に勝ることは、勿論であらう。是れが、所謂宗派の精神であると。(ibid, pp. 95-100)

Fox 女史の日記には、五月二十日、二十一日及び二十三日の日記が省略され、二十二日の日記は Mill に關說せず、二十四日乃至二十七日の日記は、Upton に於けるものである。斯くて二十八日女史は、再び倫敦へ立戻つたのである。此日 Finsbury に於て女史は、Calvert 醫師に出遭つたので、連立つて J. S. Mill を東印度會社に訪れた。女史等は、Mill に案内されて東印度會社附屬の博物館を見物した。夫れより一同は、折角の好機を失ふのを恐れて、the Pantheon of British (the Westminster Abbay を云ふ) に出掛けた。此處で Mill は、興味ある研究の對象として國民性の相違を論じた。即ち Mill に依れば、

「佛國人は、種々の國民性を有して居る。佛國の偉人は、何は兎もあれ、總て本質的に一個の佛國人である、他方英國人の個性には、特に英國人に共通な著しい資質がない。即ち各人は、彼自身の途を歩み、彼自身の功績が後に從ふ。然るに佛國人は、特に一人の指導者に支配されるが故に、若し其指導者が有能な人物であれば、國民と共に何事をも成就することが出來る　他方英國に於ては、慣習と輿論とが支配者である。故に多少なりとも主義を有する人物は、英國に於て確かに幾人かの弟子を集められる。併し決して普遍的熱心を鼓吹することは出來ない。佛國人は、他國人より速かに總ての新機軸を採用するけれど、夫れが佛國人の獨創であることは甚だ少ない。而して佛國人は、夫れを充分稀薄にして、歐羅巴全體に逆輸入する。斯くて殆んど總ての新學說は、佛國より來るのである。併し若し夫れが佛國人に取て餘り深奥なる問題である時には、彼等は知らぬ振をするのである。次に獨逸人に取て、或思想は、彼等の思辨的眞理の目錄に一つ附加はるに過ぎない。即ち獨逸人は、夫れを先づ變更する位に留めて、殆んど何等の面倒をも惹起せぬが故に、彼等は本質的に思辨的國民である。他方英國人は、彼等の本質上實際的であり、又彼等の思辨的見解を概ね人生の行爲と道德上の本分とに關係させるが故に、新らしき眞理に臆病である。何故と云ふに然らずんば、英國人は、從來無爲に生活したと是認せざるを得ざるからである。從て新生活(life de novo) を始める勇氣ある者も、極めて少ないが、併し其勇氣ある者は、確かに翹ゆられる所があるのである。兎に角獨逸人は、今日最も寬容な國民である、何故と云ふに、彼等の社會を構成するは、全く眞理の進步發展のためにあるやうに思はれるからである。斯れば獨逸人は、總ての者を呼ぶに、彼等の半神半人(demigod) の上に漠然たる方法に依てゞも何等か光明を與へる兄弟を以てするのであると」。(ibid., pp. 103-104)

次に話は、宗派の精神や自愛に及んだが、夫れは既述の所と重複するので省略した。

翌五月二十九日の日記に依れば、Fox 女史は、W. E. Foster、John Mill 及び彼の弟妹、King 夫人等と朝食を共にした後、暫らく談話に花を咲かせた。此日も Mill が、談話の中心人物であつた。先づ彼は、是認の愛情 (Love of approbation) が人事に影響する事實を以て、同情の切願に基づくと斷じ、次の輿論の恐怖が

頗る有用な統率者なる旨を論じた。又彼に從へば、吾々は仇敵に四方を包圍されつゝ生活すてう假定の下に、行動する社會のやうに見えればこそ、總てが儀式張るのである。續いて Mill は、正しい結論も往々誤謬に依て引出されるけれど、夫等の結論は、事物の本質上、決して誤謬に基づき得るものではないと論じた。話は轉じて古代希臘人に移る。即ち古代希臘人には武士道がなかつた。故に希臘人は、弱者を保護しなかつた。勿論基督敎は、先づ弱者の保護てう義務を敎へたが、希臘人の間に於ては、力が名聲と信用とに對する大道であつた。其處で Mill は、より高い敎義を古典的書籍に求めた所、僅かに Thucydides の中に一句丈け見出した。――曰く「同等の人物と戰ふは、劣等の人物と爭ふよりも遙かに貴いことである」と。最後に Mill は、Geneva に於ける黨派根性に就て話した。

即ち此地に於ける保守主義と急進主義とは、遂に都市の城壁を破壞するか、若くは之を保存するかと云ふことに迄も論爭するに至つたが、斯る問題は、英國に於ても所謂黨派根性に依て屢々取扱はれて居る。併し是れは、甚だ窮した原動力であつて、忠告する價値があると論じた。(ibid., pp. 105-106)

右は五月二十九日の日記に現はれた所であるが、以下數日の日記は、原本に省略されて居る。飛んで六月三日の日記を見るに、此日の夕刻女史等は、John Mill を誘ふて、Carlyle 夫人や、Charles 夫妻を訪問したと云ふ丈けで、何も Mill に關する記述がない。(ibid., pp. 106-107)

Fox 女史の日記は、六月十二日迄再び原本に省略されてある。十三日の日記に依れば、女史一行は、Mill 等と共に Exeter Hall に開催された奴隷賣買非認演說會 (the Anti-Slavery Meeting) に出席した。出演者は、Prince Consort, Albert, Fowell Buxton, Daniel O'Connell, Sir Robart Peel, Sir Thomas Acland, Guizot, Northampton, 卿 Shaftesbury 伯等であつた。女史は、Guizot が演壇に現はれた時に、彼の顏が嘗て John Mill の言つた「凡ゆる佛國の偉人は、先づ本質的に佛國人である」てう言葉を說明するのに興味を覺えたと云ふ。要するに此日の日記は、其他の出演者の態度等を叙したに留まる。(ibid., pp. 107-108)

以上にて Fox 女史の倫敦滯在中の日記は、原本に打切つてある。原本は直ちに七月十七日附の Clifton に於ける日記となつて、其間約一ヶ月省略されてある。七月二十日 J. Wilson Croker が、女史を訪れて雜談の末、話は Mill に及んだ。即ち女史は日記に左の如く記して居る。

「Mill が宗敎的見解を吐露したのは、耳新らしい事である。何故と云ふに數年前まで彼は、父 James Mill の敎へた誤謬を其儘遵奉して、全然宗敎に反對する偏屈漢であつたからである。J. Sterling すら、Mill は從來決して今日の如くではなかつたと考へて居る程である」と。(ibid., pp. 111-112)

右の記述丈けでは何を意味するか不明なるも、私の考へる所では、Fox 女史が、Croker に女史と Mill との久しき會見の模樣を語つて、Mill が屢々クェーカー敎の美點等を推賞した事實を知らせたものであらう。而して兩者は、Mill の宗敎觀の變化に驚いた結果、右の如く女史は、日記に敍述したものではあるまいか。

八月七日の日記には、Jeremy Bentham 全集を編纂して後世有名となれる Sir John Bowring が、女史を訪れたと記してある。Bowring の談

チューードル、スチュアート兩朝に於ける工業政策（三）

高木壽一

五

既にゾムバルトの述べたる如く、近世專制君主國は資本主義的利益即先づ第一に資本主義的工業及對外的貿易の進捗者となり補助者となりたるが、特に當時の基本工業たりし毛織物工業について、近世英國に於ける最始の對外的大取引たる Merchant Adventurers による貿易の發達と共に他の機會に於て略述したることあれば、茲にはエリザベス朝時代の工業組織より述べる。

エリザベス朝時代に於ける新經濟事情の本質は貨物の生産的職分と分配的職分の分離に在る。大工業をして遠隔の市場と接觸せしむるに必要なる經營能力は益々一の商人階級によりて行はれ、親方工匠は生産の遂行にのみ專心することゝなつた。斯くて工匠が最早消費者と直接相接觸せずして、自己の商品或は仕事に對する市場を發見するに、商人或は直接雇主としての仲介者の資本に依賴するに到れることは、エリザベス朝以後、チャールス一世時代に到る諸記錄に多き、(1)都市工匠と其都市郊外の工匠との間。(2)同工業に關する二個の組合の間。(3)同組合内に於ける工業的利益及商業利益を代表する二階級の間に於ける總べての紛議の背後に横はる根本的經濟事情である。

而して、エリザベス朝以後の工業組織の變遷はロンドンに於ける大組合を採りて其組織を檢するを適當とする。特に Clothworker's Company の記錄は其當時の代表的組合の組織作用の完全なる説明を與へる。

同組合中にて分たるべき三個の主たる階級がある。第一は洗張工、仕上工等の親方工匠より成り、一般に他の組合員によつて雇傭せらるるも、斯る業のなき時は、些かの資金或は信用を有するものは織物を購入し、之に手を加へて商人に賣却することもある。第二の階級のものは、田舍の機業家（Clothier）より、未成品の織物を買入れ洗張工、仕上工等を雇ひて之を仕上げ、之を輸出商人に賣却するを專業とする Merchant employer である。第三は之等、既製の織物を輸出に向くる商人である。

右の三階級を以て同組合全員を盡したるものに非ず、他に多くの小賣商も存在するも之は暫く措き以上の三階級が如何なる利害關係に立つかを見たいと思ふ。